

2021年横浜ナザレン教会降誕節第二主日礼拝
「確かな目標」ルカ福音書2：21～35

【聖書】

ルカによる福音書 2:21 八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

22 さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23 それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。24 また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。31 これは万民のために整えてくださった救いで、32 異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」33 父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。34 シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。35——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

1 人生の目標

新年あけましておめでとうございます。昨日は、一都三県の知事達が政府に緊急事態宣言の発令を要請したというニュースが飛び込んできて、緊張感が一気に高まりました。新年早々、心騒ぐ不安な船出です。今まで、人類は未知の感染症を幾度も経験してきました。それらが人間社会に大きな変化をもたらして、歴史を前に推し進めてきたと聞いてもいます。新型コロナウイルスも又、私達の生活や社会を大きく変えていますし、元に戻る事は難しいでしょう。今まで確かなものだと信じていたものが脆くも崩れ去るという経験を私達はする事となります。ですが、こういう時こそ、主イエスの十字架のみ前で、父なる神を礼拝したい、心を静め、周囲の状況に惑わされること

なく、なすべき事を教えてくださいと、神の導きを求めたいと思います。

「周囲の状況に惑わされる事なく」と言うと、昔見た生活科学番組を思い出します。記憶があやふやなのですが、「怒り」というテーマであったと思います。どういう内容だったかというところ「これこれこういう実験に参加してください」と番組の視聴者から実験参加者を募り、テレビ局に一人づつきてもらいます。そして心拍数とか脈拍、血圧などを図る小型モニターを装着してもらった所で、「手違いで実験に使う機械が故障しました。修理している間、テレビ局の喫茶店でお待ちください」と実験参加者を喫茶店に案内します。実は、参加者は知りませんが、ここからすでに実験が始まっているのです。喫茶店のウェイトレスやウェイターさん達は、みなプロの役者さん。参加者に対して次々とありえないほど失礼な態度をとります。挨拶しない、水をこぼしても謝らない、注文ミスをする、お客が呼んでも同僚と話して返事もしないなど。そうやってわざと怒らせて、心拍数や脈拍を計測し、参加者の心拍数や血圧など、どういう状況になるかを観察するという実験でした。当然、皆、怒り出して、席をたって喫茶店を出て行く人もいたし、店員さんにくっついてかかる人や、お説教を始める人もいました。血圧なども乱れます。しかし、何人も実験した中でたった一人だけ、殆ど怒らず、血圧等のデータも、ほぼ平常に近い人がいました。最後に、番組のスタッフがたね明かしをするのですが、その人に「どうして怒りを抑える事ができたのですか？」と聞いた時、その人が次のように答えました。「そりゃ、はじめはむかつとしましたけれど、でも、私は喫茶店で休憩するためにテレビ局に来ているわけではない、私の目的は、この後に行われる実験に参加する事だと思い出したので、それ以外の事は、まあ、仕方ないと思えたのです。」

自分の目標、目指すべきものをしっかりと見ていけば、周囲の状況に振り回される事が少なくなる、というのは、本当にその通りだと思います。それが一生の目標であれば、私達の人生は、周囲の状況に流されない確かなものとなるでしょう。自分の一生かけての目標をもつことができる、というのは、幸せな事です。しかし、人生の目標が自分だけの立身出世、自分の幸福、富や名誉、自分の欲望を満たそうとするだけの自己中心的なものであれば、却って虚しい、と聖書は語ります。それらは時の流れに虚しく消え去るからです。ですが、父なる神は時をこえた永遠のお方です。この神のみ心に叶った目標こそ、私達が命を与えられた意味ではないかと思えます。しかし、神のみ心とは何なのでしょう。

神の国の完成、すべての人が天の御神の支配のもとで、神を神とし、お互いどうし、尊重し合い大切に思い合って、生きる神の国の完成、それが天の御神の目的であると聖書全巻は語っているのではないのでしょうか。聖書は、

この神の国の完成に向けての神と人のドラマ、神が人を救おうとされるドラマが描かれていると言ってよいのだと思います。この神の救いのドラマを前にして、観客だけでいることはできません。私達は、イエス・キリストによって、神の救いの物語の中に招き入れられ、そこに生きる者とされます。今日の聖書箇所に出てくるマリア、ヨセフ、シメオンもまた、神の救いの物語の中を生きた人々でした。中でも、感慨深いのは次のシメオンの言葉。「主よ、今こそあなたは、お言葉通り この僕を安らかに去らせてくださいます」と神に感謝するシメオンの歌は、私達の心を揺さぶります。このように生き、このように平安のうちに世を去りたいと願います。神の救いの物語を確かな目標を示されて生きるシメオンの姿を見ていきたいと思ひます。

2 救いの物語

1 / 1 は、クリスマスから八日目、飼い葉桶に生まれた救い主に「イエス」という名前がつけられた日です。この日を記念して、新年礼拝を1 / 1 に捧げる教会もあります。イエスという名は、「神は救い給う」という意味があります。ユダヤ人には一般的な名前であり、特に長男によくつけられていたそうです。神の独り子は、神の民イスラエルの一員となりました。そして、生まれてから四十日後、エルサレム神殿を両親と共に訪れます。22節「モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。」「彼らの清めの期間」とは、厳密に言えば母であるマリアの清めの期間です。律法では、男の子を出産した女性は、四十日の間、神殿に行く事も禁じられ、宗教的な祭具に触れる事もできなかつたようです。これは出産で疲れた身体を休ませる「産休」の意味もあつたようです。四十日がすぎると神殿に行つて、清めの為小羊一匹をささげるようにと律法に定められていました。しかし、もし貧しくて小羊が無理なら、鳩を捧げなさい、ともありました。ですから、24節の「山鳩一つがい、家鳩のひな二羽」というのは、マリアの清めの為のいけにえであり、なおかつヨセフとマリアは貧しかつたという事がわかります。

エルサレム神殿に上つたのは、マリアのためだけではなく、幼子イエスを神さまに献げるためでもありました。夫婦の間に生まれた最初の男子は、親の命の象徴であり、神さまのものであるから、神さまに献げられねばならない、というのです。子供の命は親の所有物だと、子を支配しようとする親のあり方は、神さまの喜ぶ所ではありません。現代に生きる私達が多いに学ぶべき事です。21節から24節まで、ヨセフとマリアの夫婦は、貧しいなりに、神の戒めをきちんと守つていたことが丁寧に記されています。神の独り子は、神の民イスラエルの一員として、社会にデビューしました。

福音書のこういう箇所を読むと、キリストの教会が、歩みの最初から、イエスさま登場以前の旧約の物語、神と神の民の間の歩みをととても大切にしていることが分かります。それは教会の歴史にもきちんと残っています。紀元後三世紀から四世紀、新約聖書がようやく成立した頃、旧約の神は、裁く神、罰する神であるから、イエス・キリストの教えとはそぐわない、ユダヤ教の聖典でもある旧約聖書を教会から排除しよう！とする運動が起こり、大層な勢いであったようです。しかし、大半の教会は、ユダヤ教から引き継いだ旧約聖書を聖典から外す事はなく、大切に語り伝えてきました。そしてやがて、旧約聖書を排斥していた勢力は、消えて行きました。

何故でしょうか？旧約聖書には、神と人間の悪戦苦闘の戦いが描かれている、人間の罪の現実と、そこに働きかける神の憐みが赤裸々に描かれているから、というのが大きな理由の一つではないでしょうか。神を神とできず、神を裏切り続ける神の民イスラエル、しかし、それでも尚、神はご自身の民イスラエルを救おうとして、何度も何度も呼びかけ続ける。神の民も、この類まれなる神というお方について、考え続ける。この神と人間の長い歩みに目を背けての、人間の救いはありえないから。旧約聖書を抜きにして、神の救いの物語は考えられません。今日の聖書箇所では、命名と割礼から始まって清めの期間や長男を神に献げる事など、短い数節の間に、救い主の親となったヨセフ・マリア夫妻が律法の決まりごとを果たしていく様子を記す事によって、ルカはその事を私達に伝えようとしているのだと思います。

3 シメオン

そして、神に背く人の現実があるからこそ、26節、正しい人で信仰が篤いシメオンは「イスラエルの慰められるのを待ち望」んでいたのです。「慰められる」というのは、主語がありません。聖書で主語がない時は、神の御業を示します。シメオンは、神ご自身がイスラエルを慰めてくださるのを待ち望んで祈っていたのでしょ

う。印象深い「慰める」という言葉は、先ほど共に読み交わしたイザヤ書40章から来ていると考えられます。「慰めよ、わたしの民を慰めよと／あなたたちの神は言われる。」このイザヤ書40章が語られた時、神の民は、敵地バビロンに囚われの身でした。彼らが天の御神を裏切り、自分たちの欲望を満たす為に好き勝手に生きた結果、南ユダ王国は滅ぼされたからです。彼らは囚われの地で、国が滅んでも、尚自分たちを救い出そうとする天の御神を再び見出したのです。ですから、「イスラエルの慰められるのを待ち望む」というのは、罪を遥かに超える神さまが救いを与えてくださることを待ち望

む、という意味があるのなど思います。人の罪を見てみぬふりをするというのではなくて、民がその罪をはっきりと見つめて、神に立ち帰るということでしょう。しかし、それは神が罪を赦してくださるねばできる事ではありません。

神が、ご自身の民を罪の重荷から解放してくださる事をシメオンは祈り願っていたのです。シメオンが住んでいた頃のエルサレムも、また、人の罪が渦巻いていました。エルサレム神殿がありました。大きな勢力を誇っていたのは、大祭司を頂点とする神殿の高級祭司達であり、ユダヤの名門貴族達もエルサレムに住んでいましたが、一方に貧しい人々もいたでしょう。また、エルサレムにはローマ軍の駐屯所もありました。エルサレムには、宗教的欲望も含めて、人間の欲望渦巻く都会。しかし、シメオンは、人間の欲望に惑わされる事なく、ただひたすらにまっすぐ神に向かい、イスラエルの救いを、自分ばかりでなく、仲間の救いをひたすら求めて生きていたのだと思います。彼がどのような職業の人で家族はどうで、等は全く書かれていません。が、彼は祭司ではなく、一般信徒であったようです。にも拘らず、26節、「主が遣わすメシアに会うまで死なない、とのお告げを聖霊から受けていた」とあります。「聖霊のお告げ」というと、超常現象を思い浮かべます。シメオンが祈っていると、どこかから声が聞こえて、「お前は神が遣わす救い主に会うまでは、死なない」という声が響いた、等と。それも無いとは言いきれませんが、どちらかという、そんな派手なものではないのではないかと思います。シメオンは、様々な日々の課題を父なる神に祈り、その導きの内に生きていく過程を通じて、時間をかけてシメオンに与えられた確信ではないかと想像します。日々の生活や、エルサレムで起こる様々な事件を通して、シメオンは祈り考え続けた、神の救いについて、イスラエルについて、自分のできる事について。エルサレムでは、ローマ軍に反乱を起こす人々が連れてこられていたでしょうし、政治的な陰謀もあったでしょうし、富めるものが貧しい者を圧迫する社会でもありました。そんな人間の現実に囲まれていたシメオンは、神の民を慰めようとする神ご自身の働きを目を凝らして見出そうとしたし、神の御旨を聞こうと耳を澄ましつつ、待ち望んでいた、それは、神に「どうぞ、私をあなたの救いのために用いてください」と祈り続けた日々でもあったと思います。その結果、「救い主に会うまでは決して死なない」という確信が与えられたのだと思います。

そして、その時はやってきました。シメオンが神殿に入ってきた時、マリア・ヨセフ夫婦は、いけにえをささげようと幼子イエスさまを連れてきていたのです。多くの参拝客がいたエルサレム神殿の外庭。シメオンは、迷うことなくイエス様に向かって進み、両親から、赤ん坊を受け取り腕に抱きま

す。腕にだくということが非常に重要であったと思います。両親から捧げられた子を受け取るのは、本来、祭司のつとめでしたが、ここでは、その役割をシメオンが果たしています。それはふさわしい事でした。

赤ん坊の重みを腕に感じ、心臓の鼓動さえも産衣ごしに感じ、乳の匂いを嗅ぐシメオン。「ああ、神からの救い主がまことに人となって、この世界に生まれでてくださった」と、腕の中に息づく小さな命、確かな命に、天地万物を造られた御神のギュッと凝縮した愛と正義を見出したシメオンであったでしょう。だからこそ、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」という言葉がでてきました。シメオンの魂の讚美です。「救いを見た」、「見た」は経験する、知る、という意味がある言葉です。シメオンは、救い主と会った、救い主を知った、神の義なる愛をその身体で知りました。シメオンは、この時、自分の命は、この救い主に現れている神の義と愛を経験するためであったのだ、と確信したのでしょうか。「ああ、これで平安に死ぬことができる」何のために自分が生きているかが分かるというのは、私達に生きる実感を与え、大きな力を与えてくれ、安らかに去っていく力をも与えてくれるのではないのでしょうか。

私達の命は、てんでばらばらにあるのではなく、神の御国がこの地上に現れるという大きな目標に向かって用いて頂ける命だからです。神の救いの遠大な計画の中に、私達の命はきちんとした場所を持っており、その役割を確かに果たしたと知る事ができるのですから。どんな人でも、神に用いられる事を願い求め続ければ、神の救いを知ること、経験し、神に用いて頂けるからです。そして、イエス・キリストによって示された父なる神を知り、他の人々に証しすることができるのです。シメオンがイエス様について、「異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉です」と詠っている通りです。私達もユダヤ人ではない異邦人です。もともとの神の民であるイスラエル以外の外国人もイエス・キリストを通じて神を知ることができる、とシメオンが詠っています。それは、神学者や祭司、現代で言えば牧師や神父に限ったことではありません。シメオンも、この後に出てくるアンナも、祭司でも貴族でもなければ、律法学者でもない、市井の人です。今日、ここで神を礼拝している私達と何一つ変わりはないのです。

ですが、それは私達がキリスト・イエスにどのような態度を取るかにかかっています。シメオンは両親を祝福し、マリアに向かって預言します。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、反対を受けるしるしとして定められています。あなた自身も剣で心を差し貫かれます。多くの人々の心にある思いがあらわ

にされるためです。」主イエスは、神の民にとって試金石となる、と言っています。主イエスを救い主、キリストと受け入れ、永遠の命に立ち上がるか、イエスを救い主である筈はないと、これに躓き、神の子を殺して、倒れふすのか、どちらかを選ぶかは、私達の選択次第なのだと思います。しかし、その一方で、命ある限り、私達は何度も選びなおすことができます。この地上に命が与えられているということは、神に招かれ続けているという事なのだと思います。

4 祝福

最後にイエスの生涯に関するシメオンの悲痛な預言は、「祝福」の言葉として述べられているという点に心を留めたいと思います。私達の欲望を叶えるものが、必ずしも祝福ではないのです。祝福とは、神からの命の力を伝授するという事だからです。この子が長生きして立身出世することが、必ずしも親に対する祝福とはならないのです。むしろ、この子が真理であること、この世の欲望に生きる人間の反対を受けるほどに、徹底的に真理である事こそ、この子の両親へのまことの祝福となります。それは両親自身の自己中心的な欲望から生まれる期待を打ち砕き、神への眼を開けるものとなるからです。母マリアは、この世に比べようのない悲痛の底にまで人間的な思いを刺し貫かれますが、しかし、それによって永遠の生命への眼が開かれます。ヨセフとマリアが主イエスの両親としてではなく、主イエスによって救われる罪人として主イエスに対する時、彼らの祝福は満ち、彼らの命はまことに意味あるものになるのだと思います。もちろん、私達も同じです。私達も、主イエスを救い主として従いゆく歩みの中で、神の祝福を受け、打ち砕かれ、変えられていくのです。変えられる事なしに神に用いられる事もないでしょう。

見通しの立たない混乱の中に始まった2021年、イエス・キリストを通じて、自分の命を神の国のために用いることを祈り願い始めることができますこと、父なる神に感謝します。今、キリスト・イエスを通じて父なる神を礼拝している一人一人が、神の国のために特別に用いられ、神のご計画の中に大きな場所を得ることができますように、そうして御国がきますように、祈り願います。